23の講義内容　生活に根ざした「方言ことば」で書く文章　2007.11.22 更新

方言と文学作品

夏目漱石『坊っちゃん』は、四国愛媛（関西域）の文末ことば「…なもし」が知られる。

○第一先生を捕まへてなもしした何だ。

○菜飯は田樂の時より外に食ふもんぢやない」とあべこべに遣り込めてやつたら「なもしと菜飯とは違ふぞな、もし」と云つた。

という具合に、末尾表現に「…なもし」が用いられている。

現代でも多くの作品中に方言が用いられている。

その一つ、松本清張作『砂の器』（二度に渡り映画化）には、「あきらめかけた今西修一郎警部の目に飛び込んで来たのは、日本地図の中にある「亀田（かめだ）」の文字だった…」「被害者・三木謙一の息子の博に聞く所によると、三木の出身は岡山だと言う。また、カメダという言葉に聞き覚えもなし。今西は、岡山と東北弁の謎を解くべく国立国語研究所へ向かう。するとなんと、岡山～島根県の一部で、音韻が東北方言に類似している「出雲弁」という方言が使われているということを知る。そこで島根県の地図を調べると、中国山地の合間に亀嵩（カメダケ）という地名を発見。更に捜査を進めると、出雲弁は東北弁と同じく、語尾が不明瞭になるという。つまり、「カメダケ」が「カメダ」に聞こえたという可能性も…！その後、博が調べた所、被害者の三木謙一は元警官だったらしい。警官時代に何らかの恨みを買ったのでは…と読んだ今西は、吉村を連れて早速『亀嵩』へと向かう！！」という

筋書きに、ここで『日本言語地図』が広げられて用いられたことは有名だ。（http://www.tokyo-kurenaidan.com/seicho12.htm）

東北方言では、井上ひさし『吉里吉里人』が知られ、日本各地には町おこしのグループが創ったミニ独立国がブームとなった時でもある。鹿児島県与論島の「ヨロンパナウル（花珊瑚）王国」や大阪の「そやんか（そうでないか）王国」秋田の「ホジネランド（間が抜けている）」と多様な方言が用いられている。

現代の方言ことば

「方言商品」ということばを聞いたことがなくても、「方言が書かれている商品」とか、「方言で命名された品物」といえば、だれもがピンとくるだろう。その商品や品物は多岐に拡張している視覚文字に依拠している。例えば、インスタントラーメンの命名で、

うまいっしょ（北海道）〈うまいでしょう〉の意。

好きやねん　（関西）　〈すきなんだよ〉の意。

とっぱちからくさやんつきラーメン（九州）〈最初からやみつきになるラーメン〉の意。

うまかっちゃん（九州）〈うまい〉に「ちゃん」ことばを複合。

といった塩梅になる。地域限定ビール（地ビール）にも、

ビアっこ生（東北）指小辞の「っこ」を付ける。

じょんのび（新潟）〈のびのびとくつろぐ〉の意。

でらうま（中部）〈どえりゃー〉と〈デラックス〉を混淆。

広島じゃけん（広島）〈広島だから〉の意。

と地域になじみ深い方言ことばをビールの名前にして発売している。このように食材の方言化はめざましいものがあり、これらすべてが視覚文字に表出するのである。この視覚化は、道路の標識や看板などにも及ぶ傾向にある。「シートベルト　しちゃらんせ」（「みんなじフォローしちゃらんせ」というだけ。自分はな～んもせん）〈大分県〉と見えている。

ところが一方、発話言語としてはどうかというと、逆に公共の場から益々閉め出されているから不思議だ。その理由はといえば、如何にも田舎風で、イメージに合わないというコメントが付されている。実際、結婚式場での親近感のある方言ことばでの司会やスピーチは嫌われるようだ。日本語の言語構造には、根深く「ウチ」と「ソト・ヨソ」という棲み分けが意識されてきているからだ。このために、現代の日本人は晴れの場では共通語を用い、褻の場では方言を使うといった、二重言語の生活を身につけているのである。東京という大都会に暮らす人々が、同じ出身県の人と出会うと、突然、その言語活動自体が変容することは、誰もが経験していることと思う。また、咄嗟の場面しぐさのなかで表出し、「あの反射板ひずるしいなぁ！」と表現したときなど「それ、どこのことばなの？」と問われることもあろう。まだ、こうして生き続けている方言ことばはよかろう。やがて共通語化の波に呑み込まれてしまう方言のことばは、二度と再浮上することがないからだ。

実際、国語の授業などで古典作品と向き合うときに、江戸時代のことばづかいにその拠り所を知ることがあったりするからだ。例えば、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』には、

きさま國元にて、これなる身どもがいんもふとのお蛸と、密通をせられたといふこと、跡にて聞て腹立はいたしたれども、たんだひとりのいんもふとがこと、どふした縁でがな、貴様でなくては添ぬと申すゆへ、不便におもつて堪忍の胸を撫て、すいた男に添せずとおもひきはめ、わざ／＼めしつれて參つておざるヤア。

といった、静岡（駿州）のことばの助動詞「ず」が用いられている。意味は「好きになった男に添わせようと思い立って」ですから、否定の助動詞の「ず」ではなく、意志推量の「ず」で、今日のことばでは、「負けず嫌い」と同じ表現がここに見えているのである。意味は、「負けようと思うことも嫌いだ」というのがこの共通しているところだということに気づかれた方はたいした物だとなる。元を辿れば室町時代の「ウズ」、

・下心。仁者を友にせう人は、悪い者に遠がからずんば、必ずその名も、その徳も亡びうず。（『エソポ物語』473頁）

院政時代の「ムズ」、「ムトス」という表現である。

方言ことばを文章に表現する

自分が生まれ育った地域のことば表現を作中に用いることは容易いことだが、これが住んだこともなく、聞いたこともないところのことばで表現するとなるとこれは容易ではない。であれば、自分の知ったお国ことばをいれていくことで、まずは書き出してみてはいかがだろうか。

長崎方言を用いた小説に、井上光晴『丸山蘭水楼の遊女たち』〔新潮社刊〕（一八六三年。数年後に控えた明治維新という一大転換を予感するかのように、時代はその歩みを早めていた。長崎は丸山の遊廓界隈を舞台に、時代の波に翻弄されながらも、ひたむきに生きようとする男女数名の愛憎、苦悩、希望が同時進行の形で描出されてゆく。綿密な考証に裏付けられ、土地の言葉を自在に操って、抒情性と力感溢れる文体で生き生きと語られる、著者初めての歴史小説：http://www.shosai.ne.jp/CGI/search/search.cgi?mode=stand&file_name=sc861250_t.book）について、嘗て

分析したことがある。この書は是非一読しておきたい。因みに、井上光晴は、一九二五年、福岡県久留米市で生まれの作家である。此の作品は過去、文学座高橋悦史、太地喜和子によって上演されている。

方言ことばの実際

次に、島根県出雲ことばの会話表現を見ておこう

「ここんとこ、なんぼでも、葉っぱが、落ちて、えけんがのー」

「しゃんしゃん、はいちょって、ごしなはいませよ」

〈共通語訳〉

秋田県のことば

「人の成功をえぐゎんじゃがる。用にたちそうもないが、すてるもえぐゎんじゃだ。自分より出来るものをえぐゎんじゃにする」（嫉ましい、馬鹿臭い）

京都ことば

「桜貝のぬたどすな。おひなさん思いだします。なつかしおすなー」

「また失敗したンかいな。ほやさかい、言わんこっちゃない」

「そんなにきっちりせんでも、ほどらいにしといたらどうヤ」

「うっとこの組は、男子と女子がハダハダ（ぴったり合わぬこと）でまとまらへんので、なんぎするワ」

沖縄ことば

「みちへ　いぢへ　いき　ぬばまし」（見て行って、息を伸ばしたい）

「いみやは　せめて　うたん　今は攻めて討とう」

「うききよら」（浮いて美しい）

「めづらがる」（愛する）